表5 コア能力

知識	なし		
技能・思考能力	○論理的思考、○問題解決能力、○コミュニケーション能力、○情報収集・処理能力、		
(10項目)	○長期展望、○IT活用能力、○科学的な調査・分析能力、○決断力、○時間管理能力、○対人交渉・調整能力		
態度	○責任感、○倫理性、○自信を持って仕事に取り組む態度、○目標達成志向、○規		
(8項目)	律性、○チャレンジ精神、○積極性、○好奇心		
価値(1項目)	Oアスピレーション		

ていない。このことは、留学や訓練の目的や 目標設定、さらにはその内容を考える上で示 唆するものが大きいと思われる。

(3) 能力の向上の評価

表6は、42項目の能力について、留学によってどの程度向上したかを、日本留学者とインドネシア留学者に評価してもらい(「最低1」~「最高4」の4段階)、高いと評価されたものの順に並べ直したものである。また図3はそれをカテゴリー別に見たものである。

主な考察は以下のとおりである。 全体として能力向上の認識は高い ここでも、日本及びインドネシア留学者い ずれにおいても、能力向上の自覚は高い。「かなり向上した」(ポイント3)未満の項目は、日本留学者では、「インドネシアの全般的な開発課題や政策課題に関する知識」「地方重視」の価値観及び「日本語運用能力」で、インドネシア留学者では、「英語運用能力」「国際性」及び「日本語運用能力」のみであった。

「知識」よりも「技能・思考能力」や「態度」面でより向上

能力を「知識」、「技能・思考能力」、「態度」、「価値」に分けてみると、図3のとおり、留学の効果は、日本、インドネシアいずれも「知識」の面に限られるのではなく、むしろ「態度」の変容において最も大きく、その後に「技能・思考能力」、「価値」が続き、「知識」は

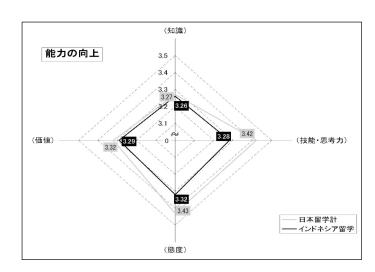


図3 カテゴリー別の能力向上評価

表6 能力向上の評価(評価の高いもの順)



(注) 「**」及び「*」はそれぞれ1%、5%の水準で統計的に有意な差があることを示す。

相対的にいって向上の認識が最も低い。有用度の評価とまったく同じ結果となっている。

日本留学者とインドネシア留学者とでは能力向上にかなりの差

同じく図3が示すように、日本留学組とイ

ンドネシア留学組の比較では、前者が後者に 比べ「技能・思考能力」、「態度」を中心に、 全体的に能力が向上したという認識は高い。 また個々の能力について、日本留学者とイ ンドネシア留学者で能力向上の評価に有意な

表 7 留学中の活動の能力向上への貢献度評価 (貢献度順)

留学中の活動

教員や大学主導の活動の能力向上	への貢献度	カリキュラム以外の	カリキュラム以外の自主的な知識・技能開発		
自主的なアカデミックなス	舌動	Ħ	課外活動等		
日本留学			インドネシア留学		
参考文献等資料解読	3.79				
資料検索・収集	3.78				
レポート・論文作成	3.78	da de de de la finale de la companione d	+		
		参考文献等資料解證			
ウナルシフェブト・カルゴモ	0.074.4	3.7 レポート・論文作品			
自主的なアカデミックな活動	3.67**	資料検索・収集	3.67		
教員による個別指導 実習・実験	3.52**	3.6 ——			
	3.59**				
ゼミナール	3.57**	講義	3.56**		
1.エに関する労閥	3.54	神教	3.30**		
ITに関する学習	3.34	自主的なアカデミッ	ックな活動 3.53**		
英語学習	3.51**	自主的なチガナミ	7.5.5.5.4.4.3.5.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.4.3.5.5.5.4.5.5.5.5		
日本での日常生活	3.49	3.5 ——			
教員や大学主導の活動の能力向上への貢献度	3.46**				
教員「八十工等の石動の能力同工への貢献及	0.404	Tに関する学習	3.44		
教員の研究活動への参加・補佐	3.43**	TTEMPONE	0.11		
インターンシップ	3.4				
学外の勉強会組織・参加	3.39**	3.4			
1 / 1 - 7 / C Jak Jak Parting P J J H	0.0011	実習・実験	3.37**		
講義	3.3	XI XW	910 (* * * * * * * * * * * * * * * * * *		
カリキュラム以外の自主的な知識・技能開発	3.3				
インドネシア留学生との交流・共同活動	3.3				
		3.3 学内の勉強会組織・	参加 3.29**		
		ゼミナール	3.28**		
日本国内の旅行	3.27	教員による個別指導	事 3.27***		
		教員や大学主導の流	舌動の能力向上への貢献度 3.26**		
		インターンシップ	3.26		
		インドネシア学生と	この交流・共同活動 3.26		
課外活動等	3.21	3.2			
ティチング・アシスタント	3.19**	3.2			
日本人学生との交流・共同活動	3.19				
他の国の留学生との交流・共同活動	3.18				
		英語学習	3.13**		
		学外の勉強会組織・			
		カリキュラム以外の	つ自主的な知識・技能開発 2.98		
日本語学習	2.93				
		地域住民との交流・			
		2.9教員の研究活動への			
		課外活動等	2.85		
地域住民との交流・共同活動	2.81	2.8			
		ティチング・アシス			
		外国人との交流や非			
		その他の言語の学習	2.37		

(注) 「**」は、1%の水準で両グループに有意な差があることを示す。

差があった項目は、表6の中で「**」や「*」で示すとおりである。これによると42項目のうち約40%に当たる16項目において、留学先により能力向上に有意な差が見られる。これは有用性については9項目にしか差がなかったことと比べれば、留学経験の違いが異なった能力向上をもたらしていることが示唆される。

「インドネシアの開発等に関する知識」と「地方重視」の価値観において、インドネシア留学者が高い向上度を示しているほかは、いずれも日本留学組の方が高い。特に、「規律性」、「チャレンジ精神」、「コミュニケ・ション能力」、「グローバル・国際的基準重視」、「国際性」などが日本での方がより身についたことが示唆されている。

(4) 能力向上の観点から見た留学中の活動 の意義付け⁽⁵⁾

表7は、留学中のどのような活動が能力向上に貢献したかについて、4段階(「最低1」~「最高4」)で評価してもらい、それぞれの活動の貢献度を日本留学者、インドネシア留学者別に高い順に並べ替えたものである。主なファインディングスは以下のようである。

留学生自身の自主的な勉学が能力向上によ <u>り貢献</u>

日本留学者、インドネシア留学者いずれの グループも、講義やゼミなどの大学が提供す る活動よりも、レポート作成など自らのアカ デミックな活動が能力の向上に繋がったと認 識している。特に、「参考文献等資料解読」、「レポート論文作成」、「資料検索・収集」は 高く評価されている。大学院で学んだ者が大 半を占めていることから、当然の結果といえ るかもしれない。

全体として日本留学者の方が留学中の活動 をより高く評価

他方、表7からも明らかなように、留学中 の活動の評価については、両グループでかな りの相違が見られる。日本留学者は、インド ネシア留学者よりも全体として、留学中の活動の能力向上への貢献度を高く評価している

個々に見ても、ほとんどの項目で、日本留学者の評価が有意に高い。「教員による個別指導」、「実習・実験」、「ゼミナール」、「学内外の研究会の組織・参加」、「「教員の研究活動への参加・補佐」、「ティーチング・アシスタント」などがその項目である。また、日本留学者の間では、大学外の活動である「日本での日常生活」を能力向上に貢献するものとして比較的高く評価していることは注目される(「カリキュラム以外の自主的な知識・技能開発」と「課外活動等」については、項目が異なるので両者の差の検定は行なっていない。

他方、「インターシップ」の評価について は両者で有意な差はなく、また「講義」につ いては、インドネシア留学組の方がその意義 を積極的に評価している。

6.まとめと結論

以上個々のファインディングを示してきたが、ここではそれらをまとめるとともに、それらが、今後特定の職業人の能力向上のための留学支援事業を考える上でどういう意味を持っているかを述べてみたい。

留学の評価は極めて高いが、身につけた能力の活用が課題

本事業全体についての受益者(留学者)の評価は、極めて高いと言っていい。能力向上の観点からの評価も、「きわめて向上した」と「かなり向上した」の間に評価されている。

しかし一方、実際の職場での活用となると「かなり活用している」と評価は低くなる。この種の調査では、全体的に高めの評価がなされるので、より実態を把握する上で、今後この点に着目した調査も必要であろう。

有用度が特に高い"コア能力"の抽出/「技 能・思考能力」や「態度」が重要 今回の調査の中の能力の有用度に関する質問から、"コア能力"とでも呼ぶべき有用度が特に高いとされた 19 の項目を抽出した (「5-(2)」参照)。

ここで留意すべきは、これらの項目はほとんどが「技能・思考能力」と「態度」に関するもので、「知識」に関する項目は含まれていないことである。もしこの"コア能力"の向上が留学の目的であるとすれば、従来の知識中心型の留学の考えを根本から変える必要があるかもしれない。

行政官に求められる能力は、業務内容や職階などにより様々に異なっていると思われるが、ここに示したのは将来を期待されている中堅のインドネシアの行政官が選んだ中核的な能力であり、今後行政官の能力について議論する場合(特にインドネシアにおいて)たたき台のひとつとして役に立つであろう。

能力向上の観点からみて留学事業は概ね成功/「技能・思考能力」や「態度」がより 向上

上記のコア能力の向上という観点から、今回の留学事業を見た場合、これら19項目の能力は、「きわめて向上した」と「かなり向上した」の中間ぐらいに評価されており、この限りにおいて本事業は有効であったといえよう。

能力の有用性の評価と同様、留学による能力の向上についても、「知識」よりも「技能・思考能力」や「態度」がより大きく向上したという結果になっており、今後類似の事業を行なうとすれば、この点からも留学の目的・プログラムの内容を再検討する必要があろう。

日本留学は有効

本調査のもうひとつの重要な結論は、日本 留学がインドネシア留学に比べて概してより 有効であると評価されていることである。日 本留学において多くの点でインドネシア留学 より能力の向上があったとされ、また日本留 学で提供される様々な学習機会(講義、ゼミ、 勉強会等)がインドネシア留学に比べより能力向上に貢献したと評価されている。ただそれが、他の国に留学した場合にもみられる外国留学一般の効果なのか、日本留学特有の効果なのかを知るにはさらなる調査と分析が必要である。

留学中の多様な活動が能力向上に貢献

さらに、留学における能力向上には、講義 やゼミなど大学における主要な活動だけでな く、ティーチング・アシスタントや教員の研 究への参加や補助といったいわば副次的な活 動、レポートや論文の作成など自主的なアカ デミックナ活動、さらには、日常生活や学生 同士の交流など課外の活動までもが関わって いることが明らかになった。今後行政官等の 職業人育成のための留学生受入れプログラム を作成に当たっては、この点に十分配慮する 必要がある。

本調査研究の限界と今後の展望

今回の調査には時間的、経費的制約などから、2つの大きな限界があった。ひとつは、この調査では、能力の向上について受益者(留学者)本人の主観的な評価しか聞いていないことである。一部少数に対してインタヴューも行なわれたが、上司や同僚など第三者の評価は十分に考慮されていない。このことから、例えば、評価が甘くなりがちでスコアが高くなる傾向が見られたのかもしれない。

第二は第一の点とも関連して、能力の有用度や向上度を主観的に判断してもらうにせよ、何らかの共通の基準を示すことも可能であったかもしれないが、今回はこれも上記のような制約から行なわれていない。例えば「アスピレーション」とはどういうものを指しており、それが「おおいに向上した」とはどういうことなのかの判断は、回答者に委ねられた。今後の同様な調査では、特にCompetency論などで用いられている具体的な行動レベルでの定義や評価基準などを用いることが考えられる。

いずれにしても職業人に求められている能

力の向上という観点から留学を見た場合、従来の知識取得中心の留学観では十分とらえきれないことが明らかになった。また、それとも関連して、留学中の多様な活動がこのような能力向上に関与していることが示唆されており、この点でも受入れ側としての大学側の教育・訓練の提供の仕方に問題を投げかけるものである。先に述べたように、大学に対する多様な期待や需要に応えるという意味でも、このような観点からの留学の効果(より一般的に大学教育の効果)に関する研究がもっと蓄積される必要があろう。

注

- (1) 本稿は、国際協力銀行(JBIC)の委託による「高等人材開発事業(II)」事後評価の調査結果に基づき執筆されたものであるが、ここでの分析や見解は筆者のものであり、JBICのそれを表すものではない。また、この調査の報告書は現在とりまとめ中であるが、本稿は必ずしも報告書の内容そのものではない。この調査結果を使用して本稿を執筆することを許諾いただいたことについて、JBICに謝意を表する。
- (2) 当時約8,000人であった在日外国人留学生を20 世紀末までに10万人にまで増加させる計画。
- (3) ここでは、ある能力が実際に活用されているかどうかと、能力の有用性とは一応別の概念として区別している。前者はまさに現に使われているかどうかであり、後者は有用であると認識されているが、現実の様々な諸条件あるいは部署により、実際に使われている場合もあれば、そうでない場合もあり得る。
- (4) やや特異なスコアを示す「英語運用能力」と「日本語運用能力」は、カテゴリー別の平均からは除いて考察。以下、カテゴリー別の比較では同様の処理をした。
- (5) 「課外活動等」については、項目の内容が異なるので、カテゴリーとして日本留学者とインドネシア留学者の比較は行なっていない。

参考文献

- 石附実(1972)『近代日本の海外留学史』ミネルヴァ書房:
- 伊藤彩子(2006)「日本留学の学習・生活体験が 職務能力の向上に与える効果に関する研究 - イ ンドネシアの政府行政官の日本留学を事例とし て」広島大学大学院・国際協力研究科修士論文.
- 岩尾寿美子・萩原滋(1987)『留学生が見た日本 - 10年目の魅力と批判』サイマル出版会.
- 岩尾寿美子・萩原滋(1988)『日本で学ぶ留学生 - 社会心理学的分析 - 』勁草社.
- 太田隆次(1999)『アメリカを救った人事革命コンピテンシー』経営書院.
- 小方直幸(1998 『大学卒業者の就職と初期のキャリアに関する実証的研究 大学教育の職業的レリバンスに関する研究 』広島大学・大学教育研究センター.
- 小方直幸(2001)「コンピテンシーは大学教育を 変えるか」高等教育学会編『高等教育研究』4集、 71-91頁.
- 佐藤由利子(2000a)『日本の留学生政策のインドネシアにおける影響 人材養成の観点から」国際開発学会『国際開発研究』11巻2号、201-219百
- 佐藤由利子(2000b)「日本の留学生政策のインドネシアにおける影響 親日家養成の観点から」日本評価学会『日本評価研究』2巻2号、59-78百
- 佐藤由利子(2004)「政策評価マトリックス (PEM)を使った定量的政策評価の事例 - イン ドネシアとタイに対する日本留学政策評価」日 本評価学会『日本評価研究』4巻2号、39-56頁.
- JICA 地方行政人材プロジェクト(2006)『インドネシアの公務員制度』.
- 高木史朗(2004)『コンピテンシー評価と能力開発の実務-成果主義時代の人材アセスメント手法と展開方法』日本コンサルタントグループ.
- 21世紀への留学生政策懇談会(1983)[®]21世紀への留学生政策に関する提言』.
- 二宮皓・中矢礼美・出口真弓 (2005)「Cross-

Cultural Competencyを育成するカリキュラムの開発と検証」『カリキュラム研究』14巻、89-102 頁.

- 日本労働機構(1997)『大学院修士課程における 社会人教育』調査研究報告書、No. 91.
- 三鷹市(2004)『三鷹市人財育成基本方針』.
- ライチェン、ドミニク・サルガニク、ローラ (2006)『キー・コンピテンシー - 国際標準の学 力をめざして』立田慶裕監訳,明石書店.
- OECD/CERI (1986). Background Report for Innovation Exchange Seminar on Higher Education and the Flow of Foreign Students.